

解答は全て7枚目の解答用紙に記入しなさい。

受験番号

【問題一】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（語句のぬき出しや説明については、句読点や記号も一字に数えます）

小学生のころ、そのころの校庭はせまく、上級生がすごい速さでかけ回っていて、私はつきたおされてしまい、頭がぼうつとなったことがある。自分はもう何も考えられなくなったのかもしれないと思って心配で、起き上がってから二二が四、二三が六というふうになんか九九を言ってみて、言えるのでようやく安心した。九九をそらで言えるなどというA習慣にBすがりつくようにして、初めて、私は、正しく考えることができるという自信が持てた。なぜその九九は正しいのか。それは、先生がそれが正しいと言って教えてくれたからと言うしかない。どうして先生が正しいのか、という問いを自分に出してみると、もうつまってしまった。そういううたがいが雲のように自分の内からわいてきて、それを根本から解くというわけにはゆかない。

自分とはいったい何ものか。なぜ生きているのか。二かける二はいくつかという問題さえ、先生の教えてくれたことの記憶にすがってかるうじて答えられるというふうなのに、先生がC教室で教えないこれらの問題について、①いったいどのように答えを出せるというのか。I問題はここで終わらず、なぜ生きているのかの次に、どのように生きてゆくのがいいのか。よい社会とはどういうものか。というふうな問題が、重なり合うようにしてわき出てくる。そういう問題についてなやまないというのも、問題に対する一つの答えになっている。だが、子どものときになやまないにしても、大人になってからもなやまずに一生すごせるだろうか。そういう問題について、先生や両親や姉や兄の答えを聞いて信ずるというのも、一つの行き方だ。だが、自分で答えを見いだしたいと思う者にとって、どういう道があるか。少年時代の終わりに私は、こう考えるようになった。そして今も、その考えは変わらない。

なぜ生きるか、というふうな問題は、その問題の中に自分を投げこんでみないと答えの出ない種類の問題であって、九九の問題のように二かける二は四になっているのだからというふうな約束に合わせて答えが決まる種類の問題ではない。日本の動物園には今ライオンが何匹いるかというように、経験によって確かめて答えを出せる問題でもない。なぜ生きるかは、問う人によって答えが同じではない。同じ人でも、その問いを新しく問うことが必要になってくる。その人がどのように生きてきたかによって、なぜ生きるかという問題に対する答えもちがう。

こう考えると、数学や科学の問題のようにあらゆる人にとって同じ答えを出すやり方を見いだせないようなこの種の問題は、問題として立てないほうがいいという考え方も出てくる。II、人が生きているということは、この種の問題を問いたくなるということでもあり、こういう問題を人生から切り落とすことは難しい。その問題については、このようにもあのようにも考える。ヨチが残るというふうな問題があるということを、私たちは認めるほうがいい。問題に答えるためには自分を投げこまなくてはならないということは、その問題を言葉の上だけで考えて答えを出すことができないということである。言葉として言ったり書いたりする前にあるさまざまな感情、経験、行動などをもとにして、自分で答えを出すことが必要になる。

なぜ生きるかという問題に対して、今生きているからという答えを出すでしょう。その場合に②自分がこれまでに生きてきたことについてある程度の満足を持っていると言えよう。それでも、もっと苦しいときには、そういう答えでは満足できない。人は生きなくてはならないのだ、それが人間の※1おきてだという信念をはつきりと自分の前に置いて答えとする人もいよう。そのおきてをbシユウキヨウから受けつぐということもある。自分の生きることが他人を殺すことになるという場合に会おうと、人は生きなくてはならぬというおきてをどのようになかすがが、難しい。私が小学生のころはもう日本は戦争の時代に入っていたので、自分が生きることが他の人を生きさせないことになるというのは、子どものころから私においさる問題だった。

こういう難しい問題に対するには、③言葉の根元にあるものに返って、答えを探すのがいい。私たちが育てられてゆく間に、私たちはおたがいに助け合ってくらしてゆくようにいろいろのしぐさを身に付けてゆく。人を殺すということは、生まれてから私たちが身に付けてきたしぐさの中にはない。こうして、自分が育ってきた道筋をふり返ると、その中に人間同士の助け合いへの願いがこめられていたことが分かる。その願いを生かしてゆくことが、それが難しいときにさえも、人間の目標であるはずだ。よい社会とはどういうものかと問うときに、私たちが探す答えは、子どものときから身に付けてきたさまざまなしぐさと感情の中にある。

ところが私などの育ってきた時代には日本が加わっていた長い戦争があつて、人間の助け合いの目標がたやすく実現するようではなかった。しかし、自分が目標からそれるときにも、その目標からどのようににされているかという事実から目をはなさないということが、私のささやかなcノゾみになった。助け合いというのは、国内のこととしては民主主義、国家の間のこととしては平和ということである。民主主義とか、平和とかいうと、よくdエンゼツに使われる言葉で、言葉としてDうき上がつてしまうので、わざとここではさけた。助け合いという、私たちの体の動きと結び付いた言葉を使うほうが、問題をはつきり考えてゆくのに役にたつ。

III、民主主義とか平和とかいうと、人間の文明にだけある問題のように考えられるけれども、助け合いならば、人間をふくめて生物に広く見られる習慣である。動物のようなことをしてはいけないというふうには大人が子どもをしかることがあるが、そのときには人間は動物以上の物だという考えがふくまれている。しかし、助け合いという点で見てゆくと、人間が動物以上かどうかは疑わしい。同じ種の中で、クウフクでもないのにある物が他の物を殺してしまうなどということは、動物の世界ではあまり見られない。このことから目をそらさずに、自分の生き方を決めてゆくことにしたい。自分で生きてゆくことの中でさまざまな問題が答えをあたえられる。

(注) ※1おきて……必ず守らなくてはならない取り決め。

(編集工房ノア 鶴見俊輔『家の中の広場』の文章より。文章の一部を改めました)

問一 部 a e のカタカナを漢字に直して書きなさい。

問二 部 A「習慣」・C「教室」の熟語について、同じ組み立てのものを次のア～カの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 人造 イ 読書 ウ 強敵 エ 生産 オ 勝敗 カ 不満

問三 部 B「すがり付く」・D「うき上がつ（うき上がる）」について、本文中の意味と同じものを次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

B	すがり付く		D	うき上がる
	ア 助けをもとめる			ア ありふれている
	イ ねらいを定める			イ 目立っている
	ウ あともどりをする			ウ なじんでいない
	エ 身をまかせる			エ あいまいでない

問四 I III に入る最も適当な言葉を、次のア～カの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は二度使えません。

ア つまり イ たとえば ウ たしかに エ あるいは オ しかも カ しかし

問五 筆者は本文で、私たちが会おう可能性のある問題を三つに分けてとりあげています。その三つの問題を、本文中より、それぞれ十五字以上三十字以内でぬき出し、初めと終わりの三字を答えなさい。

問六 部 ①「いったいどのように答えを出せるというのか」とありますが、筆者は、この文章の中で、三つの答えをだしています。その三つを本文の言葉を使って、それぞれ十字以内でわかりやすく答えなさい。

問七 部 ②「自分がこれまでに生きてきたことについてある程度の満足を持っていると言えよう」とありますが、筆者がこのように言うのはなぜですか。その理由として適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 過去や現在の自分の自信がしだいに大きくなり、未来の自分まで支えてくれるものになっていくから。
イ 過去や現在の自分や自分のまわりの世界を認めることで、未来の自分も受け入れることができるから。
ウ 過去や現在の自分が感じてきた幸福感が、未来に直面する不幸をも乗り越える力になってくれるから。
エ 過去や現在の自分のほこらしい経験によって、未来に向かう積極的な意識や行動が生まれてくるから。

問八 部 ③「言葉の根元にあるものに返って」とありますが、ここで言う「言葉の根元にあるものに返る」とはどういうことですか。本文の言葉を使って、「こと」に続く形で五十字以上六十字以内で説明しなさい。

問九 次のア～オの文について、本文の内容と合っているものには○、まちがっているものには×をつけなさい。

ア 子どものころから繰り返し身に付けた習慣というものは、人間が自信をつけて生きていくうえで欠かせない要素である。
イ 「なぜ生きるか」という問題に対する答えは、一人で簡単に出せないからこそおもしろく、人間が考える意味がある。
ウ 「民主主義」とか「平和」という言葉はよく用いられるものであるが、自分の生き方を決める時にはあまり役に立たない。
エ 人間が動物以上であるためには、小さい時から「言葉」を大切に使うことを学び、相手のことを思いやる必要がある。
オ 自分が目標からそれるときにも、自分自身とまわりとを冷静に見つめながら現実の状況を見失わないことが重要である。

【問題二】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（語句のぬき出しや説明については、句読点や記号も一字に数えます）

莉子は夏休みに、亡くなった祖父と母が住んでいた古い家を訪れ、叔母さんといっしょに家を片付けることになる。庭には祖父が大切に育てた蓮池があった。早朝、蓮の花が咲く時、莉子は過去にさかのぼり、まだ少年の頃の祖父と出会うことになる。

「おまえはだれじゃ？ どっから来た？」

「街のほうから」

と返して、その先はことばをにこした。

「こつちに親戚がおるんか？」

「そう」

「墓参りか？」

「そう」

すると少年は少し安心したように、^①「なんや、墓参りか、と繰り返した。」

「あなたは？ どうしてひとりでここにいるの？」

莉子は、真正面に向き直り、あらためて少年を見つめると、

「なんで会ったばかりのやつに、そねえなことを言わんといかん」

彼はふてくされたような顔をして、すぐにそつぽを向いてしまった。

そのまま会話が途切れてしまったので、莉子はしかたなく姿勢をもとに戻し、再び沼に目をやった。

今まで気がつかなかったけれど、ほとりには無残に枯れ果てた植物が、根もとから倒れこむようなカツコウで積み重なっている。その茶色に変色した葉の形をひと目見るなり、

「蓮？」

と、小さな声でつぶやいた。

沼の中に目を凝らすと、底のほうにも大量の蓮の残がいが横たわっていて、その上をたくさんの魚が泳いでいる。

「ここには、蓮の花が咲いていたんだね」

莉子のことばに、少年はひとコキユウおいてから、

「ああ。二年前までは沼いっぱい。今は見る影もないけどな」

と、こたえた。

「沼いっぱい？」

莉子は繰り返してから、目の前を埋めつくすいちめんの蓮の花園を思い浮かべた。

澄みわたった空の下、朝陽をいっばいに浴びて咲きほこる。タイリンの花。今にもはじけそうなほどにふくらんだつぼみ。風が吹くと葉の上の露がきらきらとところがり、野鳥たちが自慢の歌声を響きわたらせながら、草原のかなたへと飛び去っていく。

莉子は、うつとりとした心地で（ ）を細めた。

「沼いっぱい蓮の花……。本当に見えてくるような気がするよ。でも」

莉子は、再び少年のほうを見た。

「どうしてこんな山奥に、蓮の花が咲いていたんだろう」

「またそれか」

少年は、うんざりしたように言って、ため息をついた。

「理由はいろいろあるやろう」

「いろいろって？」

「ここにはむかし、蓮庭のあるお屋敷があったんかもしれん。そのうち住む人がなくなってお屋敷はなくなったけど、蓮池だけは残ったんや」

「他には？」

「他には？」

莉子は、^②「わくわくしながら少年をせかした。」

「鳥が偶然ここに蓮の実を運んできたのかもしれん。長い年月のあいだに、それがどんどん増えていったんや」

「他には？」

少年は、面倒くさそうに（ ）を鳴らした。

「おまえは、そんなことに興味があるんか？」

「うん、あるよ。だって、最初から同じようにやり直したら、ここにまた沼いっぱい蓮の花が咲くかもしれないでしょう？」

少年は少しのあいだ黙りこんでから、ゆつくりと莉子のほうに顔を向けた。

「初めてじゃ。そんなことを言うやつは」

③少年のことはには先ほどもまでのとげとげしさがなく、その表情もずっと和らいでいるように見えた。うれしくなって莉子がほほ笑みかけると、少年は照れたような顔をしてまた目をそらした。

「この沼は、ぼくが見つけた」

「えっ？」

「二年前の夏休みに、ぼくが最初に見つけたんや」

少年はそうしてぼつりぼつりと、これまでのいきさつについて話を始めた。

「新しい山ぶどうの木を見つけよう思うてな。やぶを奥へ奥へと入って行って、偶然この沼を見つけたんや。見わたす限り蓮の花が咲いとつて、きれいやったけど、あんまりきれいすぎてこわいような気もした」

うんうん、と莉子はうなずいた。

「ぼくは絵が得意やから、その蓮の花を シャセイ してな、夏休みの宿題といっしょに学校に持っていったんや。そしたら図画の先生が、ええ出来じゃって、ほめてくれてな。県展に出したら、特選になった」

「すごいじゃない」

感心したように莉子が言うと、少年は少しだけ口もとをゆるめた。

「そやけど、その絵が県展に飾られたことで、大変な騒動になってしもうた。絵を見たどこかのえらい先生が、この蓮の花は古代蓮じゃないかって言い出したんや」

「こだいはず？」

初めて聞くことばだった。

「千年前か二千年前か、もしかしたらそれよりもっと古い種類の蓮かもしれんってな。そのころに咲いとつた蓮の花と、特徴がよう似とるんやと」

「その、古代蓮にはどんな特徴があるの？」

「花びらの枚数や。古代蓮は、今の蓮より花びらの数が少ない。それと色や。赤色に近い。そりやあ鮮やかな紅色をした花やった。この村の近くに古墳時代の遺跡があるけえ、そのころのもんやろうかって、えらい騒ぎになった」

莉子はうなずいて、

「それで？」

と、続きをせかした。

「それで、村に調査団の先生たちがやって来た。ぼくが案内して、先生たちをこの沼まで連れてきた。そやけど、もう冬に近かったから、蓮の花は全部枯れてしもうて、茶色の 花茎 が沼から突き出ただけやった。結局、次の年の開花を待とういうことになって、いったん騒ぎは オサ まるはずやった」

そこまで一気にしゃべったところで、④少年の口が再び重くなった。

「騒ぎはそのあとが続いたのね？」

と莉子が問いかけると、少年は黙ってうなずいた。

「それからもたくさんの人たちが見物にきて、蓮を引っこ抜いて持って帰ったり、土器のかけらを探してそこらじゅうを掘り起こしたり……。山道は踏み荒らされ、道端の花も、山ぶどうもアケビの実も、全部持っていかれてしもうた。ぼくはだんだんおそろしゅうなった」少年の声が、急に消えてしまいそうになった。その時の追い詰められた気持ちがよくえってきたかのように、少年は途切れ途切れに話を続けた。

「次の年の夏、蓮の葉は沼を埋めつくしたけど、花はただの一本も咲かんかった……。もうこれで終わりにせんといかん思うて……。ぼくは、先生に言うたんじゃ。今までうそをついたりしました。ぼくの絵はうその絵じゃったって」

「うその絵？」

莉子は、繰り返した。

「沼に咲いとつたんは、どこにでもある普通の蓮の花やった。ちょっと大げさに描いてみたら、古代蓮やて騒ぎになってしもうて……。ほんまのこと言うたら怒られる思うて、今まで言い出せんやったって」

「そう。そんなことがあったんだね」

そうして世間の熱は冷め、古代蓮騒動もなんとかオサまった。裏山にも、やっと以前の静けさが戻ってきたけれど、沼の蓮の花は枯れ果てたままだった。少年はそのことを、ずっと思い悩んでいたのだろう。

「その絵は今、どこにあるの？」

莉子がたずねると、

「学校にある。ぼくの手もとにあるんは」

言いながら、少年はシャツのポケットに手をやって、中からきれいにたたまれた一枚の紙を取り出した。
「この下描き^{したが}だけや」

目の前に差し出されたその紙を、莉子は黙って受け取った。広げてみると、そこには色鉛筆^{えんぴつ}で※2素描^{そひよう}された蓮の花の絵があった。
（ああ、これは……）

手前に大きく花びらを広げた花が一リン。その向こうにふつくとほころび始めたつぼみがひとつ。
どうして見まちがえることがあるだろう。それは祖父のアトリエに一枚だけ残っていた、あの額^{がく}に入った蓮の花の絵だった。
そして、莉子は確信した。

（この子はおじいちゃんだ。おじいちゃんなんだ……）

「あなたは、うそつきなんかじゃない」

莉子は小さな声で、⑤でも、きつぱりと言った。

「なんやて？」

「この絵の蓮の花は、本当に赤色に近い、燃えるような紅色をしている」

「なんでそんなことがわかるんじや？」

「わたし、この花を知ってるの。ここじゃない、別の場所に咲いてる同じ花を」

「ほんまか？ それは古代蓮か？」

「それはわからないけど、でもそっくりよ」

「だったら、ぼくも見てみたい。その花はどこに咲いとるんじや？」

家の庭の池に、と言いかけて、莉子は口ごもった。

「ここからはずっと遠いところに咲いてるから、見せてあげることはできないけど……」

莉子は浴衣^{ゆい}のたもとを探^{さが}って、中から紙の包みを取り出した。中には、台所の味噌^{みそ}つぼから取り出しておいた、ひとつまみ分の
※3蓮の実が入っている。

莉子は、ゆつくりと包みを広げていった。少年は大きな目をさらに見開いて、莉子の手の中をのぞきこんでいる。

「これはね。その花の実なの。あなたにあげるから、育ててみて。きつと同じ花が咲くはずよ。この沼の蓮の花をよみがえらせる手がかりも、この実を育ててうちに見つけることができるかもしれない」

「おまえは、ほんまにおもしろいことを言うのう」

少年は、疑り深げな顔をして、莉子の手の中の実をひと粒^{つぶ}だけつまみあげた。

「蓮を実から育てるつちゅうんは、聞いたことがない。ほんまに花が咲くんかのう」

「咲くよ、きつと。そしたらわたしの言ってることが本当だってわかるから」

自信たつぷりにほほ笑む莉子を、少年はしみじみと見つめながら、

「そんなふうに言われたら、ほんまにそうなるような気がしてきたよ」

と、⑥初めてうつすらと笑みを浮かべた。

「わかった。育ててみちやる。そやけど、ただでもらうわけにはいかん。よそもんに借りは作りとうないけえの。そのうち花を増やして、何倍にもして返しちやる」

「ほんとに？」

「ああ、約束や」

「じゃあ、約束」

少年は、蓮の実の紙包みを受け取って、ゆつくりと立ちあがった。目の前に広がる沼の水面には、あかね色に染まり始めた空が映りこんでいて、ひとすじの金色の雲の切れはしが、水に浮かぶ木の葉のようにゆらり、ゆらりと漂^{たふよ}っていた。

（福音館書店 本田昌子^{ほんだまさこ}『夏の朝』の文章より。文章の一部を改めました）

（注）※1花茎…スミレ・タンポポなどのように、地下茎や根から直接出て花だけをつける茎^{くき}。

※2素描…木炭、鉛筆、筆などを用い、黒などの単色の線で対象をあらく描くこと。

※3蓮の実…この蓮の実の祖父が庭の蓮からとったもので、台所の味噌つぼに入っていたのを、莉子は片付けをしていて偶然見つけた。

問一 部a～eのカタカナを漢字に直して書きなさい。

問二 ……部I・IIの（ ）に入る最も適当な、からだの一部を表す漢字一字を、それぞれ書きなさい。

問三——部①「なんや、墓参りか、と繰り返した」とありますが、この時の少年の気持ちとして適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 見知らぬ女の子だったので気になったが、「墓参り」という平凡な目的だったので興味を失った。
イ 見知らぬ女の子だったので気になったが、「墓参り」という自分の予想通りの答えで拍子抜けした。
ウ 見知らぬ女の子だったので気になったが、「墓参り」以外の事情はないと知って心が落ち着いた。
エ 見知らぬ女の子だったので気になったが、「墓参り」に遠くからやって来たことに親しみを感じた。

問四——部②「わくわくしながら少年をせかした」とありますが、この時の莉子の様子の説明として適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア きれいな蓮の花がたくさん咲き乱れる風景を想像し、楽しくて仕方がない様子。
イ 蓮の花の謎をめぐって自然や人の関わりに関心を持ち、不思議でならない様子。
ウ 大好きな蓮の花を池いっぱいに咲かせるという夢を抱くことに一生懸命な様子。
エ 蓮の花についてのさまざまな知識を教えてもらい、好奇心が強まっていく様子。

問五——部③「少年のことばには先ほどまでのとげとげしさがなく、その表情もずっと和らいでいるように見えた」とありますが、この時の少年の気持ちを、「く気持ち」に続く形で三十字以上四十字以内で説明しなさい。

問六——部④「少年の口が再び重くなった」とありますが、それはなぜですか。その理由として適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の描いた一枚の絵から始まった騒動を、あらためてじっくりと思い出していたから。
イ 自分の描いた蓮の絵が引き起こした出来事は、思い出して話すのもつらいものだから。
ウ 自分の描いた絵をうそだと認めて「うそつき」と呼ばれているのが恥ずかしかったから。
エ 自分が描いた絵を得意げに説明し、まわりをまきこんでしまったことを後悔したから。

問七——部⑤「でも、きつぱりと言った」とありますが、この時の莉子の気持ちとして適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア おじいちゃんである少年の傷ついた心に触れ、少年に蓮池を復活させてもう一度蓮の絵を描いてもらいたいと願う気持ち。
イ おじいちゃんである少年が、悲しみのために蓮の花に対する情熱を無くして、未来の蓮池が失われると困るという気持ち。
ウ おじいちゃんである少年が描いた絵が、アトリエの絵と同じものだと分かり、蓮を長く守り続けたことに感動する気持ち。
エ おじいちゃんである少年が、過去の事件で苦しんでいるのを見て、何かことばをかけて勇気づけてあげたいという気持ち。

問八——部⑥「初めてうつすらと笑みを浮かべた」とありますが、この時の少年の気持ちを、「く気持ち」に続く形で三十字以上四十字以内で説明しなさい。

問九 この文章の表現と内容について述べたものとして正しいものを、次のア～エの中から二つ選び、記号で答えなさい。
ア 「ふてくされたような顔」や「疑り深げな顔」といった表現を用いることで、「少年」の暗い性格が暗示されている。
イ 「うんうんとうなずいた」や「感心したように」などの「莉子」の態度には、「少年」への思いやりが表れている。
ウ 季節の巡りとともに「莉子」と「少年」の交流が深まっていく様子が、お互いの立場からいねいに語られている。
エ テンポのよい会話を効果的に用いながら、少しずつ変化する「莉子」と「少年」の心の動きが巧みに描かれている。
オ たくさんのたとえを用いて美しい風景を鮮やかに描き出すことで、「少年」の淡々とした思いがより強調されている。
カ 複数の語り手の立場から物語を展開させることで、「莉子」と「少年」の複雑な気持ちが細やかに表現されている。

解答用紙

受験番号
得点

【問題一】

問一	e	c	a
		み	
		d	b

問二	A
	C

問三	B
	D

問四	I
	II
	III

問五	
	ゝ

問五	
	ゝ

問五	
	ゝ

問六	

問六	

問六	

問七	
----	--

問八	

いと。

【問題二】

問九	ア
	イ
	ウ
	エ
	オ

問一	e	c	a
	まる		
		d	b

問二	I
	II

問三	
----	--

問四	
----	--

問五	

気持ち。

問六	
----	--

問七	
----	--

問八	

気持ち。

問九	